



啐 啄 同 時

平成 27 年 9 月

校長室だより

学校教育目標 「大好き芦田 大好きみんな 大好き自分」

毎年 運動会の応援合戦を終えて思うこと・・・「大好き自分」

この校長室だよりが届くころには、芦田小学校の運動会も終わっていることと思います。今年も、子どもたちは「赤組」「青組」に分かれ、6年生のリーダーシップのもと応援合戦を繰り広げました。勝敗の結果は、当日の「声の大きさ」「アイデア」「チームワーク」などで審査され決まります。しかし、そのチームの当日までの「努力の量」「学んだことの深さ」は、「勝った」という結果とイコールでない時もあります。つまり、結果は負けたんだけど、高学年がすごく苦勞して成長した、みんなで協力していろんなアイデアを考えた・・・という年もあったのです。

そのことを考えると、私たち大人は「結果」だけでなく、子どもたちの取組の「過程」を大切にし、人と比べることなく一人ひとりの自尊感情を高めていく評価が大切です。

これに少し関連した「心に残る新聞記事」がありましたので、小林祐梨子事務局の了解(9/15)を得て以下に掲載させていただきます。

----- 結果とは -----

北京五輪陸上女子 5000m 代表 小林祐梨子

勝たなければ意味がない。『結果がすべての世界』と心から痛感させられた瞬間がある。

2008年、北京オリンピックが終わり、日本へ帰国した時の出来事だった。陸上競技の選手全員が羽田空港に到着し、心も体もリラックスしながら、出てくる荷物を待っていた。「今から名前を呼ぶメンバーはこちらのゲートから出てください」と声がかかった。そして、メダリストらの名前が次々に読み上げられた。もちろん、私の名前はなかった。



まさに、結果が評価される瞬間であった。特に、この大会で男子 400m リレーはトラック種目で日本人初のメダルを獲得したのであった。

ゲートを出ると彼らの周りには多くの報道陣、そして、一目見ようと集まった人で溢れかえっていた。つい数分前まで一緒にいた仲間だとは思えないほどの輝き。「私は悔いのないレースをした」と心に言い聞かせながら彼らの姿を遠くから見ていた。

しかし、やり場のない気持ちになり、情けなくなった。今、振り返れば「オリンピック出場」という小学校からの長年の夢を達成し、その夢に対して持っている力を全て出し切った自分を褒めてあげてもよかったのではないだろうか。結果が評価される世界であっても、結果以上に「過程」を大切にしているときは結果が出ていた。五輪後、私はその部分が課題であった。時間がかかった。自分に取りついている「プライド」という邪魔なものを取らないと、自分に向き合えなかったからだ。

人と比べることなんてしなくていい。周りからの目線を気にする必要なんてない。

「自分というものを持つこと」が次の成長につながる。

神戸新聞「随想」より

